

世間虚仮 唯「我」是真

甲「先生、私はつくづく世間がいやになりました。」

乙「それはまたなぜです。」

甲「だれもかれも、信用はなりません。世間は冷たい人間ばかりです。父も母も、兄弟も、親族も、すべてが冷たい存在です。」

乙「なるほど、それで。」

甲「私は、生きていることをつまらなく思います。」

乙「そんなら死んだらどうです。」

甲「死なれもしません。私は仏教に言うように、世間虚仮だと思います。そらごとたわごとだと思えます。」

乙「待ちなさい。そうしたところに仏教を引合いに出されては困ります。」

甲「それでも、仏教ではそう説くではありませんか。聖徳太子も世間虚仮と言われたと聞きますし、親鸞聖人も、そらごとたわごとまことあることなし、と言われたではありませんか。」

乙「いよいよもつて、仏教が迷惑します。あなたのような人生の否定の仕方を、まず釈尊がいちばん嫌われました。聖徳太子も、親鸞聖人もかかることを説きません。」

甲「なぜですか。そうした言葉があるではありませんか。」

乙「言葉はあります。しかし、かの聖人たちには、あなたにないものがあります。あなたのは、白眼世をすねてのお言葉です。人生を否定しているかに見えて、人生に逆らっているのであり、呪っているのであり、悲観しているのであり、自暴自棄になつているのです。」

甲「それでも、私は近ごろは、念仏しています。」

乙「それは真の念仏ではなくて、人生に窒息しての、たわごとです。哀歎の声です。人生逃避のため息です。真の念仏などではけつしてありえない。」

甲「……………」

乙「念仏は、念仏道です。道です。」

甲「先生、正直に申すと、先生のお話は、あまり今日まで好かなかつたのです。苦しくされるばかりですから。先日、この寺へ若い講師が来られて聞きにゆき、すっかり共鳴しました。」

乙「どんな所を。」

甲「その方は、淋しい方で、なかなか辛苦されたその経験を語られました。ぼくはあなたの方といつしよに、徹夜してでも語りたいたいと思いました。先生のお話のような、むつかしい論理的な話は、人生に必要なような気がするのです。」

乙「それは痛み入ります。だが、あなたがどこにひきつけられたかを聞いて、はつきりわかりました。あなたは、真実の大道を求めているのではなくて、安価な、感傷主義的な砂糖、いえ阿片を求めているのです。念仏でも何でもありません。」

甲「性格の弱さでしょうか。」

乙「それもあります。しかし、それよりも、徹底的な求道がたりないのです。その弱い軟鉄を打ちのめして、もつと強い鋼鉄にしなければだめです。」

甲「先生のようにおっしゃれば、私には何もありません。」

乙「親鸞聖人には金剛不壊の安心がありました。信心がありました。そらごとだわごとまことあることなしとは、他人にむかつておっしゃったのではなくて、自己自身にむかつての宣言だったのです。」

聖徳太子の世間虚仮のつきには唯仏是真の言葉があります。仏の真実が肯定されて、世間虚仮の意味があるのです。聖人の『よろずのこと、みなもてそらごとだわごとまことあることなきに』のお言葉も、それで終っているのではなくて、『念仏のみぞまことにておわします』と、仏が肯定されてあります。如来は限りなく、人間の迷妄を否定しつつ、絶対に如来の真実を肯定し、実現します。しかるにあなたのは、世間虚仮、唯仏是真でなくて、世間虚仮、唯我是真になっているのです。天地間、真実なるものはあなた自身だけ、なのです。そして他は一切そらごとだわごとまことなし。そうして白眼世をすね、感傷、涙を弄び、自己自らを葬ってゆきつつあるのです。」

甲「先生、それでも私の周囲は冷たいのです。」

乙「それでは、あなたは温かですか。」

甲「……………」

乙「私はそうは思わない。世間よりもさきに私こそ冷たいのです。熱で解けない氷はない。氷に氷をもつてすれば、いよいよ冷たくなるばかりではありませんか。」

2

甲「ぼくの考え方が違っていた気がします。ぼくはさつきから話を聞いていると、何がだかわからなくなってきました。そしてぼくの生き方が、先生のおっしゃるとおりだったような気がします。これから考えてみます。たしかに、ぼくの考えは、世間虚仮、唯仏是真というお言葉が、世間虚仮、唯我是真 となっておりました。」

乙「気がついたら、聞きかえるのです。あなたばかりではない。私どもがしばしばこの誤りにおちます。本気でご求道なさいませ。」

甲「自己清算がたりなかったのです。これからうんと精進します。」

最後の反逆

甲「私は苦しくてなりません。どうしてもわかりません。何を聞いても不安と苦しさが増すばかりです。」

乙「あたりまえです。」

甲「これならいつそ聞きはじめねばよかったですと思います。聞けば聞くだけ苦しくなるばかりです。」

乙「それはよいことです。」

甲「ちつともよいことはありません。聞かぬほうがましです。」

乙「今に皆わかります。聞かぬがましだと言ったところで、やめられますか。」

甲「やめられたら苦しみはいたしません。やめようにやめられず、といつてわかりはせず。刻々深い淵に沈んでゆくようです。どうにかしてください。」

乙「どうしてあげることもできません。深い淵があるなら沈みきつてごらん下さい。」

甲「それがいやなのです。浮かびたいのです。」

乙「そこです。沈むものなら沈むがいい。浮かぶものなら浮かぶがいい。だが、そのあなたを困らしているものは、いったい何でしょうか。」

甲「それは、この聞いてくれない心です。こうして二日も三日も、あの懇ろなお話を聞きつつどうしても聞いてくれない心です。」

乙「そうでしょうか。………△△さん。いったいあなたは何がほしいのですか。」

甲「安心立命がほしいのですが。」

乙「なるほど、それで如来はいられますか。生きておられますか。」

甲「如来がいるか、いないか。生きているかいらないか。そんなことは問題ではない！ 私がほしいのは、安心立命です！」

乙「おい！ △△さん！ もう狐の尻尾はつかんだぞ！ あなたを困らしているのは、この狐だ、古狐だ。」

甲「なんのことです。何か古狐ですか。」

乙「おい、君は如来に用事はないのだ。安心立命に用事があるのだ。」

甲「それはいけないのですか。」

乙「み法を聞くとは、如来を聞くのである。如来は、絶対の權威をもつて、われらの現実に君臨する。衆生の便宜のために実在するのでもなく、勝手な欲望の満足を得るための手段にもならない。ただ如来は無条件に絶対に、われの迷妄をその智慧光³によつて照破しつつ、如来のために、如来を承認せしめるのだ。帰命というのは、如来にあつては、絶対の招喚の勅命であり、衆生にあつては、この如来に信順するところである。」

甲「わかりません。」

乙「それなのに、あなたは、如来の眞実をば無視して、あなたの勝手から割り出した、欲を満足しようとするのだ。如来はいようがいまいが、眞理がどちらにむいていようが、そんなことは問題ではない。ただ安心立命がほしいという。かかる人間に与えられる安心立命はないのだ。あなたは、忠臣蔵に加わらない大野九郎兵衛だ。主君には用事なく、俸禄に用事があるのだ。俸禄が頂けなくなれば逃げてゆくのだ。主君を利用してゐるのにすぎない。だが、それは、今初まつたことではない。その私の根性魂が、長い間、君を動かしてきたのだ。他人はどうとなれ、自分一人がよいことをすればいいという功利主義的な古狐だ。それが一切衆生を毒し、生死界を出現し、君自身を苦しめるのだ。それが今ようやく表に姿を現わし、最後の反逆を如来にくわだて、あなた自身を再び奈落に誘わんがために、今一度化けようとするのだ。」

甲「どうかかしてください。」

乙「如来は助け、衆生は助けられる。しかるに、如来を聞く以前に、助けられた状態を考へて、まず助かった姿となり、そこへ如来をつれてこようとするのがいけないのだ。今われをあげて、如来の智慧光をあび、その大慈悲に攝取されるのだ。その

時、あなたは、出離の徑なき、十悪五逆のわれを諦観するのだ。ああ、尽十方無碍光如来のみが宣布し、君臨し、招喚し、撰取して、寸毫も凡夫のわれを許されないのだ。この如来の本願海に、全我を托して、生死、善悪、賢愚、苦楽等かかる対立を越え、如来の聖なるみむねに生きるときのみ、安心立命はあるのだ。如来本願の御はからいなれば、永劫地獄にあるも苦としない。われはわれのわれでなくて、如来のわれである。煩惱は、如来のはたらきたもう舞台、信心決定すれば、如来は実に、今来りたもうのではない。過去久遠からの御はからいによって、今あることを知るのだ。」

甲「たいへん間違っていたことがわかりはじめました。」